

## 審査の結果の要旨

氏名 涌水 理恵

本研究では、“家庭”におけるビデオ視聴をメインとしたプレパレーションが、日本の就学前の子どもにとって有効であるか否かを、鼠径ヘルニア根治術を受ける3～6歳の子どもと保護者を対象に、ランダム化比較試験により探索的に検証した。本研究により、下記の結果を得ている。

### 1. 介入デザインの決定

欧米では先行研究により、VTR等の視覚的ツールを用いたモデリングというプレパレーションの技法が、就学前の子どもにとって、最も有効な心理的準備を促すと考えられてきた。本研究では、日本の文化的背景に適したプレパレーションのデザインを検討した結果、親が子どもの個性やコミュニケーション能力を理解したうえで、家庭において、病院で迎える新しい体験を子どもに説明するプレパレーションのデザインが最も望ましいという結論に至り、医療者から提供される情報資源(VTR、小冊子)をもとに、家庭で親から子へ行われるプレパレーション(以下、介入)が、手術を受ける日本の子どもの情緒反応、身体反応、行動変化に及ぼす効果を、探索的なランダム化比較試験(以下、RCT)により検証した。

### 2. 介入の結果の要旨

#### 【介入に関する質的な検討】

介入群のうち、小冊子の規定どおりに視聴した対象は73.6%、またビデオを家庭で一度も視聴しなかった対象は皆無だった。また介入の満足度を尋ねたところ、91.7%が「満足している」あるいは「どちらかといえば満足している」を選択した。このように、本研究の介入遂行状況は、先行研究と比較して総じて望ましい結果であった。

#### 【各アウトカムにおける介入効果】

介入群・対照群ともに1)術前の準備状況(①保護者から子どもへの術前情報提供、②手術に対する子どもの認識、③子どものコーピング)、2)子どもの情動反応(①入院前から退院後にかけての経時変化、②麻酔導入時)、3)子どものバイタルサイン(①体

温、②心拍数、③呼吸数、④血圧)、4)子どもの行動変化、5)保護者の不安、を評価し、下記の結果を得た。

1)術前の準備状況では、『手術を受ける理由 (p=0.004)』『麻酔導入 (p=0.029)』に関する保護者から子どもへの説明、『手術を受ける理由 (p=0.02)』に関する子どもの自覚、またコーピングとしての『周囲の人との手術に関する(積極的な)会話 (p=0.045)』に関して、介入群が対照群を上回り、準備状況が良好であった。

2)入院を通しての情動反応では、子どもの自己評価である Face-scale スコア (p=0.038)、また、保護者の代理評価である VAS スコア (p=0.02)のそれぞれで、介入群のスコアが対照群のスコアを下回り、情動反応が抑えられていた。

3)周手術期のバイタルサインでは、『体温』(p=0.011)および『呼吸数』(p=0.005)に関して、介入群が対照群を下回り、落ち着きを呈していた。

4)退院後の行動変化の客観評価である PHBQ スコア (p=0.084)では、介入群が対照群を下回り、退行行動が抑えられていた。

5)保護者の状態不安の自己評価である STAI-S スコア (p=0.02)では、介入群が対照群を下回り、不安が抑えられていた。

以上により、「家庭におけるビデオの反復視聴をメインとしたプレパレーション」は 1)～5)の各アウトカムに一定の介入効果をもたらし得るとする仮説が提示された。

以上、本論文により、「家庭におけるビデオの反復視聴をメインとしたプレパレーション」はわが国の就学前の幼児とその保護者にとって有効であることが示され、「家庭」という安心した空間で、子どもは視覚的ツールにより家族と共に入院・手術体験をモデリングし、信頼する保護者から自らの気質や特性にあった適切な説明を受けることで、心理的により準備された状態で入院・手術に臨める可能性が考えられた。

日本ではこれまで、手術を受ける就学前の幼児に対するプレパレーション実践の有効性を RCT により明らかにした研究は見当たらず、本研究は、プレパレーション実践に関する探索的な RCT を試みたわが国初の研究として位置づけられ、今後、日本の小児外科におけるプレパレーション実践に関するエビデンスを確立するために重要な貢献をなしうる事が十分に考えられ、その意義は大きい。

よって本論文は学位の授与に値するものと考えられる。